

月全然操業しなかったが、今の状態では周年操業しなかつた漁のないのにシケを粘つてやる。魚価がよくなないので適当な漁場もないので、インフレ傾向が今の救いになつてゐる。シケ多いため毎年1~2名波でさらわれ死ぬ人がある。300鉢で昭和35年初めて行つて、置いたものを取るよりに7~8トン/日も漁獲した。同37年400鉢で6~7トン/日も漁れた。同39年には漁獲低下し3トン前後(時には漁れたが)。こんなに魚が居なくなつたかと認識を新たにした。沖縄船では枝縄13~15ヒロを10ヒロにちぢめてやつた。

漁場開拓当時焼津船で1隻図抜けて好漁する船があつたので、わざと縄を交錯させてみたところ枝縄が8ヒロだつたことがある。

タスマニヤ沖の盛漁期は4~5月、シドニイ沖では7~8月で、8月頃はシオ(北流)速くて縄が切れる。一昼夜に60マイルも流される(2.5ノット)。9月シオ弱くなり縄は切れぬが、魚も分散する。160°E東方水域に魚がある。8月24°~28°S、154°~156°Eの細長い狭水帯にメカジキ漁場、昭和39年8~10トンの漁あり、昭和41年も4~5トン漁つた。新月前で1トン足らずの漁、満月前後は大へん好くとれた。メカジキ、メカジキが主で、トンボマグロが混り、肉質良く、kg当り500円もした。餌はサンマよりイカの方が大へん喰ひが良好であつた。夕方縄を入れて夜中に揚げ出し昼終る。南に向うシオ速いため、シオ上り出来ぬときは、縄を南に入れて縄廻りして南へと揚げた。昭和41年はニューカレドニヤ方面で2~2.5トン/日、フィジー南方(27°S~)で3.5トン/日平均、西に移つてしだいに漁がなくなった。

豪州東水域8~9月メカジキ15.5°~20°C、クロマグロ19°Cぐらいの水温でとれ、大型60kg以上、中型は40kg前後、小型は20kg前後、極小は20kg以下、シドニイ沖38°~34°S、岸に近いほど小型になる。タスマン海には7月から出航したが、7月末には漁が落ちた。メカ縄浮き10kgで、メバチよく罹り、30~40尾釣れば好漁、魚体も大きい。

#### 4 ミナミマグロの漁況について

磯部 和男(神奈川県水産試験場)

##### 1) 序 文

近年ミナミマグロを対象とした漁場はオーストラリアの南の南緯50度付近の海域にまで拡大された。そこで拡大された海域を含めて1966年までのミナミマグロの漁況についてとりまとめたので報告する。調査海域は図1に示すA~Gの7海区である。

資料は神奈川県水産試験場から出している鮪漁況速報および全国鮪研究協議会刊行の雑誌、鮪漁業である。

##### 2) 釣獲率の季節変化の平年型

A, B, C 3海区のミナミマグロの釣獲率季節変化は図2に示す。

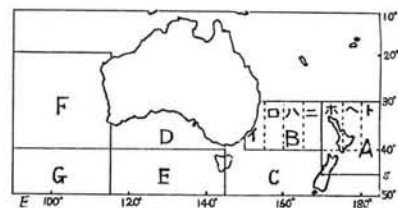


図1 海区図。

A海区は6~10月、B海区は7~9月、C海区は6~8月が好漁期である。A海区の釣獲率は、C海区に比べ高く、また好漁期も長い。C海区の好漁期はB海区の好漁期より約1ヶ月早く始まり、早く終る。

3) 釣獲率の経年変化

A, B, C 3海区のミナミマグロの釣獲率経年変化は図3に示す。

A, B, C の3海区とも年々低下している。

4) 30~40°S, 150~175°Wの海域の釣獲率の東西間の比較

図1のI~トの各海区の1961年から1965年までのミナミマグロの釣獲率の経年変化は図4、I~トの各海区の各年の釣獲率を前述した年間で平均した平均値の東西間の比較は図5に示す。

図4によるとI~トの各海区とも1961年から1965年にかけて釣獲率は低下しており、釣獲率の経年変化の変動傾向はほぼ類似しているが、図4、5から

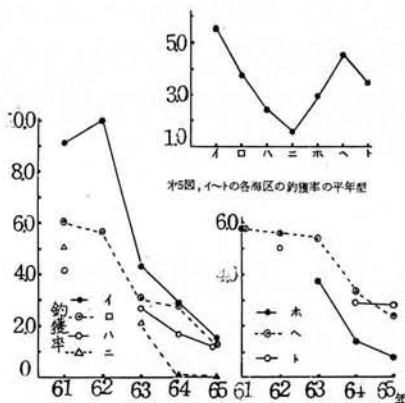


図4図 I~トの各海区の釣獲率の経年変化。

5) ミナミマグロの釣獲率経年変化と操業回数の推移について  
図6によるとA海区では釣獲率と操業回数は1957年から1960年にかけていずれも低下している。図7は上村<sup>1)</sup>が報告した上記海区付近の釣獲率と操業回数の推移である。これによると1957~60年の釣獲率は図6の同期間の釣獲率と多少異なっているが、操業回数の変化は1959年を除くとほぼ一致している。この違いについては目下検討中であ

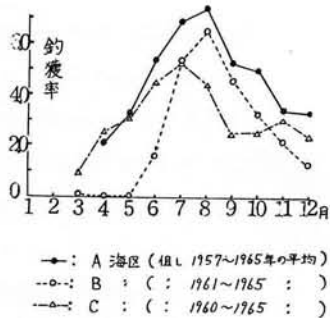


図2図 釣獲率の季節変化の平均型。

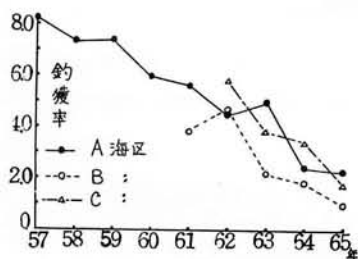


図3図 釣獲率経年変化

明らかなように、平均釣獲率には差がみられる。すなわち、I~ニにかけて低下し、ニ~トにかけて高くなり、トでまた低くなっている。

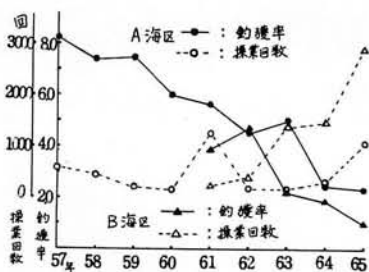


図6図 釣獲率と操業回数の推移。

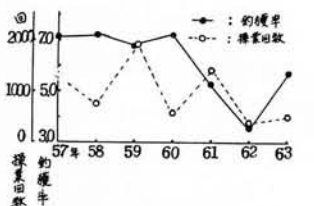


図7図 釣獲率と操業回数の推移豪州沖170E以东(上村による)。

る。

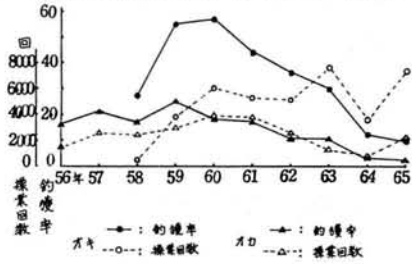
毎年の資料の抽出率が一定であると仮定すれば1957年から1960年にかけての釣獲率の低下は人為的要因とは考えにくい。

A海区の1962年～1965年の間では操業回数がやや増大し、一方1963～1965年にかけて釣獲率は低下しているため、1962年以降は操業回数の増大が釣獲率の低下に関係があつた可能性も考えられる。

B海区については操業回数の増大とともに1962年以降釣獲率が低下しており、両者の間に関係のあつた可能性も否定できない。

図8は東インド洋のオカ、オキの両漁場におけるミナミマグロの釣獲率と操業回数との関係である。

オキの漁場の1958～1960年、オカの漁場の1956～1961年の間では操業回数の増大が直接釣獲率の低下をもたらしたとはいえないが、1960年以降のオキの漁場では操業回数



は横這いなしやや増大しており釣獲率は低下している。操業回数の増大が釣獲率の低下を引きおこしているとは云えなくとも、操業回数の多いことが釣獲率の低下をもたらししている可能性は考えられる。

図9は南オーストラリア(140°E以西)におけるミナミマグロの竿釣り対象魚の航海隻数と1航海当りの漁獲重量の推移である。

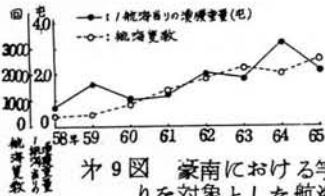


図9 豪南における竿釣りを対象とした航海隻数と1航海当りの漁獲重量の推移(C.S.I.R.O.による)<sup>2)</sup>。

これによると航海隻数の増大が1航海当りの漁獲重量の低下をもたらししているという傾向はみられていない。

またミナミマグロの延縄対象魚の釣獲率が低下傾向にあるにもかかわらず小型魚の1航海当りの漁獲重量の低下がみられないということは延縄漁船の操業回数の増大が補充量にまでは影響していないようである。

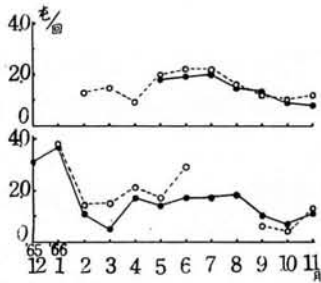
## 6) 最近の漁況について

### a 総込漁獲量と経月変化について

A, B, C, Eの4海区の1965年12月から1966年11月までの1年間の総込漁獲重量経月変化は図10に示す。

AとBの両海区の変化は類似しており、5～7月が2吨程度の好漁期であつた。この好漁期は図2のミナミマグロの釣獲率季節変化の平年型の好漁期と比べると1～2ヶ月早く始まっている。

またCとEの両海区も類似した変化をしており、12～1月、4～8月が好漁期であつた。4～8月が好漁期であつたことは図2のC海区のミナミマグロの釣獲率季節変化の平年型の好



才10図 総込漁獲重量経月変化。

漁期と一致している。

b) 魚種組成経月変化について

1965年5月から1966年4月までの間の魚種組成経月変化について述べる。

A海区：6～11月にミナミマグロが60～80%を占めた。年によりミナミマグロの割合が増え始める時期は異なるが1966年は4月に既に70%以上を占めている。

B海区：ミナミマグロは7～10月に60～80%を占め、11月以降はほとんどみられない。11月以降はキハダ、ビンナガが大部分であつた。

C海区：3～4月を除いてはミナミマグロが100%近い。

D海区：資料数が不十分のため組成の傾向ははつきりしない。

E海区：資料は11～4月間のみあり、この間、ミナミマグロは100%であつた。

F海区：5～8月の間はビンナガとキハダが大部分を占めたが、9～4月の間ミナミマグロは55～70%を占めた。

G海区：3～4月の間のみ資料がありミナミマグロが100%であつた。

c) ミナミマグロの釣獲率の分布について

1965年6月から1966年5月間の1年間におけるミナミマグロの釣獲率が1.5以上の比較的高い漁場は次のようであつた。

東インド洋のミナミマグロの好漁場は1966年1月に20°～30°S, 95°～110°Eの海域にみられ、この好漁場は3月まで続いた。3～5月には南へ移り40°～50°S, 95°～110°Eの海域が好漁場となつた。

タスマニア島周辺では6～11月には島の北東および東側、1～5月には島の南の45°～50°S付近の海域が好漁場となつた。

A海区では6～11月が好漁場となり、8～9月が特に良かった。

文 献

1) 上村忠夫：第2回鯨研究協議会記録(1964)

2) J. S. Hynd, G. L. Kesteven, J. P. Robins

: Riprint from Food technology in Anstralia

18(4) 218(5); 1966